

# 清朝の人たちからみた明代八股文の変遷について

滝野 邦雄

## はじめに

清朝の人たちが、明代八股文の変遷をどのように考えたかについては、すでに「明代初期の八股文について (1)」(『経済理論』第 336 号・p57～p74・2007 年 3 月)において、不十分ながら考察を行なった。ただ前稿は、資料の制約のため簡略な検討しか行なえなかった。そこで、ここで新たに目撃することができた資料を用いて、明代八股文の変遷についての考察を行ないたい。

そもそも、清政権が成立しても科挙はそのまま継続される。政権交代による断絶はなかった。それは、明朝最後の會試が崇禎十六年(一六四三)癸未科(鄉試は、崇禎十五年(一六四二)に挙行)として行なわれ、清朝最初の會試が順治三年(一六四六)丙戌科(鄉試は順治二年(一六四五)に挙行)として行われているので、三年ごとの丑・辰・未・戌の年に行なうという規定にしたがって挙行されたことから理解できるであろう。

子・午・卯・酉の年は鄉試とし、辰・戌・丑・未の年は會試とす。鄉試は八月を以てし、會試は二月を以てす(『明史』卷七十・志第四十六・選舉二)。

ただし、順治二年乙酉科の鄉試は、平定されていない地域もあり、十月に順天・江南・河南・山東・山西・陝西の六省で行なわれただけである。

なお、會試の行なわれた順治三年に、大學士の剛林などが、順治三年八月に鄉試を行ない、翌年順治四年二月に再び會試を行なって、人材を集め、まだ帰順していない地域であっても、生員・舉人で投降してくる者は、受験を認めたいと願い出て、認められる。

[順治三年四月乙酉(九日)]大學士剛林等、疏もて「本年八月、再び科舉を行ない、來年二月に再び會試を行ない、以て人才を収め、其の未だ歸せざる地方の生員・舉人の來りて投誠する者は、亦た一體に應試するを許さんことを請う」と。之に従う(『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之二十五・「順治三年四月乙酉(九日)」条)。

こうして順治三年丙戌科(一六四六)に鄉試を、翌年の順治四年にまた會試を行なっている。では、科挙はどうして継続して行われたのだろうか。陳維安(字は怡山。福州の人)は、『海濱外史』で、つぎのようなことを記している。

清 中國に入り。經略の洪承疇 教えるに人心を收拾(手なずける)するの法を以てす。  
[そもそも] 以て中國の俯首して歸誠する所以の者は富貴を貪圖(追求)するを爲せばな

り。社稷 亡ぶと雖も、而れども若輩（このような人たち）の八股義を作る者は、苟も富貴を得れば、舊君も固より不恤（惜しいとは思わない）する所なり。是に於いて前朝の科第の人 悉く官と爲さしむ。[そして]、甲申（順治元年：一六四四年）即位し、乙酉（順治二年：一六四五年）に即ち郷試を行ない、丙戌（順治三年：一六四六年）に會試し、四百名<sup>①</sup>を取中し、秋に再び郷試を行ない、丁亥（順治四年：一六四七年）に又た會試し、中額（合格者数）は之の如し<sup>②</sup>・・・（涵芬樓秘笈本第五集所収『海濱外史』卷一・七葉）。

①『明清進士題名碑錄索引』（上海古籍出版社一九八〇年刊）によると五百七十三名の名前が記録される。

②『明清進士題名碑錄索引』（上海古籍出版社一九八〇年刊）によると四百九十八名の名前が記録される。

陳維安によると、清政権が中国に進出すると、經略の洪承疇が漢族の人心を手なづけ引き込む方法を教えた。そもそも、中国の漢族がおとなしく従って帰順してきたのは、富貴を追求するからである。国家が減んだといっても、こうした八股文を学んできた者は、かりにも富貴を得ることができるならば、もとの君主についても顧み重んずることはない。そこで、前明朝の合格者すべてを官員とした。甲申（順治元年：一六四四年）に〔順治帝が〕即位すると、乙酉（順治二年：一六四五年）に郷試を挙行し、丙戌（順治三年：一六四六年）に會試を行ない、四百名を合格とした。その秋に再び郷試を行ない、丁亥（順治四年：一六四七年）にまた會試を行ない前回の會試のように合格者を出した、というのである。

陳維安は、洪承疇が清政権の人たちに、漢民族を味方につけるには科挙の合格者を官員につけることと科挙を行なうことが有効であると進言したという。確かに当時の大多数の読書人は、明から清へと政権が代わっても、継続して行われた科挙を受験してゆく。すると、陳維安の述べたことは、一面の真理であったのではないかと考えられる。

さて、清政権が成立して、八股文を利用した科挙が継続して行われると、明末までの八股文についての回顧が始まる。それは、清朝の八股文が明朝のものと異なり刷新されたことを主張するためであった。

清朝の人が明朝の八股文の変遷を総括する場合、南宋の嚴羽の『滄浪詩話』に始まり、明になってほとんど定説のようになった唐詩の四変の説（唐詩の発展を初唐、盛唐、中唐、晩唐の四つの時期に分けて説明する考え方）を念頭に置いたものになるのが普通であった。つまり、始まりがあり、勃興し、盛んになり、安定し、衰退するという八股文の歴史を描くことである。

清朝の人たちは、明の八股文の展開を、この四変の説に当てはめて理解しようとした。以下で、ほぼ時代順に、清朝の人たちが考えた明朝の八股文の展開について検討してみたい。ただしこれは、あくまでも清朝の人たちが考えた明朝八股文の変遷である。

### （1）魏裔介

魏裔介（字は石生、号は貞庵、又の号は崑林、文毅と諡される。直隸柏郷の人。明・萬曆四十四年（一六一六）～清・康熙二十五年（一六八六）。順治三年丙戌科（一六四六）三甲六十二

名の進士)は、「趙問源大題文所序」でつぎのようにいう。

文章 一定の所有らんか。『左〔傳〕』と『國〔語〕』とは相い勦襲(剽竊)せず、班〔固〕と馬〔司馬遷〕 各々異同有り、韓〔愈〕は莊勁(厳正で力強い)を以てし、柳〔宗元〕は孤峭(高雅で超俗)を以てし、歐〔陽脩〕は雍容(ゆったりする)を以てし、蘇〔軾〕は奔放を以てす。古の大家の文を爲す者は、皆な繩趨尺歩(型にはめる)に非ずして以て自から尺幅(文章)の中に困(刻苦する)しむ。然れども根極(根本)の理要(要旨)の位置に至る。〔そして〕章法(文章作成の法則)〔については〕、識 必ず其の絶頂(最高の境界)に踞り、語 必ず其の已陳(使い古されたもの)を去れば、則ち萬變するも、其の宗(本旨)より出でざるなり。八股の業も亦た然り。宋に<sup>はじ</sup>翫まり、明に盛んなり。蓋し嘗て〔唐〕詩を以て比擬し之を論ずるに、成〔化〕(一四六五年～一四八七年)・弘〔治〕(一四八八年～一五〇五年)の間の王守溪(王鏊)・錢鶴灘(錢福)諸公の謹嚴高潔なるは、猶お初唐中の魏玄成(魏徵)・陳伯玉(陳子昂)<sup>たぐい</sup>の流なり。嘉〔靖〕(一五二二年～一五六六年)・隆慶(一五六七年～一五七二年)の間の瞿崑湖(瞿景淳)・歸震川(歸有光)諸公の浩瀚澎湃なるは、猶お盛唐中の李青蓮(李白)・王龍標(王昌齡)<sup>たぐい</sup>の流なり。萬曆(一五七三年～一六二〇年)の間の、陶石簣(陶望齡)・湯霍林(湯賓尹)諸公の清微澹折なるは、亦た猶お晩唐中の劉文房(劉長卿)・錢仲文(錢起)<sup>たぐい</sup>の流なり。天啓(一六二一年～一六二七年)・崇禎(一六二八年～一六四四年)の間に<sup>おとろ</sup>至るに、文の敝うや甚し。何となれば、則ち以て其の泛濫(ただよう)し歸すること無く、<sup>これ</sup>之が所を爲す莫きを以てなり……

(「趙問源大題文所序」・『兼濟堂文集』卷八)。

魏裔介はつぎのように考える。つまり、文章には定まった法則というものがあるのだろう。『左傳』と『國語』とは、文章がかぶらないし、班固と司馬遷は異同がある。韓愈は莊嚴で力強く、柳宗元は高雅で超俗であり、歐陽脩はゆったりしているし、蘇軾は奔放である。古の大家で文章を書いた人たちは、皆な型にはまらず、自分の文章を書くことに苦しんだ。しかし、根本の要旨(要点)には到達しているのである。そして章法(文章作成の法則)については、見識が最高の境地にあり、言葉遣いが旧套を脱しているので、文が変化しても、その本質からは逸脱していないのである。八股文もまた同じようなものである。宋代〔の嚴羽の『滄浪詩話』〕に始まり、明朝に盛んになり、〔明・高棟の『唐詩品彙』(「正集」は洪武二十六年(一三九三)に、『拾遺』は洪武三十一年(一三九八)に成立)によってほぼ定着した〕。唐詩を四つに分類した(四變説)ようにして八股文の書法を引き比べてみると、成化(一四六五年～一四八七年)・弘治(一四八八年～一五〇五年)年間の王守溪(王鏊)や錢鶴灘(錢福)などの謹嚴高潔な作風は、初唐中の魏徵・陳子昂に類するものであり、嘉靖(一五二二年～一五六六年)・隆慶(一五六七年～一五七二年)年間の瞿崑湖(瞿景淳)や歸震川(歸有光)などの広大な作風は、盛唐の李白や王昌齡に類するものであり、萬曆(一五七三年～一六二〇年)年間の陶石簣(陶望齡)や湯霍林(湯賓尹)などのおだやかでありながら展開があるのは、晩唐の劉長卿・錢起に類す

るものであろう。天啓（一六二一年～一六二七年）・崇禎（一六二八年～一六四四年）年間となると、文体はひどく衰退した。なぜならば、それは漂う<sup>ただよ</sup>だけで落ち着き先がない状態で、文章の法則がなかったからだ、というのである。

すると魏裔介は、明朝の八股文の作風を以下の三つに分類して見ていたようである。

- ① 成化（一四六五年～一四八七年）・弘治（一四八八年～一五〇五年）年間
- ② 嘉靖（一五二二年～一五六六年）・隆慶（一五六七年～一五七二年）年間
- ③ 萬曆（一五七三年～一六二〇年）年間

そして、天啓（一六二一年～一六二七年）年間・崇禎（一六二八年～一六四四年）年間は、評価できないと考えた。

## (2) 韓菼

韓菼（字は元少、又の字は慕廬、諡は文懿。江蘇長洲の人。明・崇禎十年（一六三七）～清・康熙四十三年（一七〇四）。康熙十二年癸丑科（一六七三）一甲一名の進士）は、「心遠堂明文選序」において、王漢廷の分類を紹介する。

王子漢廷 好古力學の士なり。方に業制 義を擧げるに、高氏（高棟）の『唐詩品彙』の義例を取りて以て有明一代の八股の文を評す。〔それは〕洪〔武〕（一三六八年～一三九八年）・永〔樂〕（一四〇三年～一四二四年）兩朝を以て「初」と爲し、成〔化〕（一四六五年～一四八七年）・弘〔治〕（一四八八年～一五〇五年）・正〔德〕（一五〇六年～一五二一年）・嘉〔靖〕（一五二二年～一五六六年）を「盛」と爲し、〔隆〕慶（一五六七年～一五七二年）・〔萬〕曆（一五七三年～一六二〇年）以還（以後）を「中」と爲し、〔天〕啓（一六二一年～一六二七年）・〔崇〕禎（一六二八年～一六四四年）は則ち晩と爲す。其の間、互いに正變を分かち、初に變有り、晩に正有り。此れ高氏（高棟）の「正中の變、變中の正」の説なり……（『有懷堂文藁』卷四・「心遠堂明文選序」・九葉）。

つまり、韓菼は王漢廷の分類をつぎのように伝える。王漢廷は、古の事を好んで努力して学問する人物である。ちょうど挙業（科挙）で八股文の義例（変遷の解説）を取り上げるのに、高棟の『唐詩品彙』の義例（変遷の解説）を利用して、明朝一代の八股文を評論した。それは、洪武（一三六八年～一三九八年）・永樂（一四〇三年～一四二四年）兩朝のものを以て「初」に分類し、成化年間（一四六五年～一四八七年）・弘治年間（一四八八年～一五〇五年）・正徳年間（一五〇六年～一五二一年）・嘉靖年間（一五二二年～一五六六年）のものを「盛」に分類し、隆慶年間（一五六七年～一五七二年）・萬曆年間（一五七三年～一六二〇年）以後のものを「中」に分類し、天啓（一六二一年～一六二七年）・崇禎（一六二八年～一六四四年）年間のものとは「晩」に分類した。其の間、互いに「正」・「變」を分かち、「初」の中にも「變」に分類するものがあり、「晩」の中に「正」に分類するものがあった。これは、高氏（高棟）の「正中の變、變中の正」の説によっている、という。

韓莢によると、王漢廷は『心遠堂明文選』において、明朝の八股文を、

- ① 洪武・永樂・[洪熙・宣徳・正統・景泰・天順]：初
- ② 成化・弘治・正徳・嘉靖：盛
- ③ 隆慶・萬曆：中
- ④ 天啓・崇禎：晩

に分類しているという。ただし、それぞれ「正」・「變」を分けていたというのが、「正」・「變」をどのように分類したのか、よくわからない。

### (3) 李光地

李光地（字は晉卿，号は厚庵，別に榕村とも号す。福建安溪の人。明・崇禎十五年（一六四二）～清・康熙五十七年（一七一八）。康熙九年庚戌科（一六七〇）二甲二名の進士）も初・盛・中・晩に分類をする。ただし、天啓・崇禎年間の八股文は、その中には含めない。

明代の時文は、洪[武]（一三六八年～一三九八年）・永[樂]（一四〇三年～一四二四年）・宣[徳]（一四二六年～一四三五年）・景[泰]（一四五〇年～一四五七年）・天[順]（一四五七年～一四六四年）を初と爲し、成[化]（一四六五年～一四八七年）・弘[治]（一四八八年～一五〇五年）を盛と爲し、正[徳]（一五〇六年～一五二一年）・嘉[靖]（一五二二年～一五六六年）を中と爲し、[隆]慶（一五六七年～一五七二年）・[萬]曆（一五七三年～一六二〇年）を晩と爲す。天啓（一六二一年～一六二七年）以後は、録するに足らず（『榕村語録』卷二十九・詩文一）。

つまり李光地は、五つの時期に区切るものの、評価できるのは萬暦年間までで、天啓・崇禎年間は「録するに足らず」とするのである。

- ① 洪武・永樂・[洪熙]・宣徳・[正統]・景泰・天順：初
- ② 成化・弘治：盛
- ③ 正徳・嘉靖：中
- ④ 隆慶・萬曆：晩
- ⑤ 天啓・崇禎：録するに足らず

### (4) 蘇翔鳳

蘇翔鳳（康熙十四年乙卯科（一六七五）の舉人・康熙二十一年壬戌科（一六八二）二甲三十九名の進士）<sup>1)</sup>は、「甲癸集自序」でつぎのように分類する。

・・・文の明に在るは、猶お詩の唐に在るがごときなり。初唐は、渾穆，盛唐は昌明，中唐は名秀なり。晩唐に至れば，時を憂えて俗を憫れむの意の發して言を爲し，感激淋漓し，人を動かすや易し。洪[武]（一三六八年～一三九八年）・宣[徳]（一四二六年～一四三五年）の文は初唐なり。成[化]（一四六五年～一四八七年）・弘[治]（一四八八年～一

五〇五年)・正〔徳〕(一五〇六年～一五二一年)・嘉〔靖〕(一五二二年～一五六六年)の文は盛唐なり。隆〔慶〕(一五六七年～一五七二年)・萬〔曆〕(一五七三年～一六二〇年)の文は中唐なり。皆な參苓(ゆっくりと効果が出る人參と茯苓)なり。〔天〕啟(一六二一年～一六二七年)・〔崇〕禎(一六二八年～一六四四年)は則ち晩唐なり。諸君子 六經を以て其の義を深め、史〔記〕・漢〔書〕を以て其の氣(氣概)を廣くし、宋儒を以て其の範(規範)を端し、兵・農・禮・樂の志を以て其の用(効用)を明らかにし、得失是非の故を以て其の識(知識・見解)を大きくし、典藏を參觀するを以て其の悟(理解)を長くし、博覽雜記を以て其の慧(才智)を益す。〔これは〕固より先正の尚とぶ所と略ぼ同じ。而れども其の時の廟堂の上は、門戸 相い角い、婦寺(宦官) 擅權(權力を独占)し、忠良(忠臣) 僇辱さる。作者 末運(衰亡の命運)の陵微を感じ、懷く所の憤激を抒ぶ。故に其の質 堅剛にして、其の鋒 銳利なり。三百年の元氣(精神) 發揮して殆んど盡く。此れ起衰(文章の興廢)の金石(不変の言葉)なり……(『制義叢話』卷之二所引の「甲癸集自序」・十一葉～十二葉)。

蘇翔鳳はつぎのように考える。つまり、八股文が明にあるのは、詩が唐代にあるようなものである。初唐は、渾穆(質樸で落ち着きがある)、盛唐は昌明(盛んで輝かしい)、中唐は名秀(名高く秀でる)となる。晩唐になれば、時代を憂えて俗を憫れむという気持ちを表わして発言し、感動をあたえて晴れ晴れとさせ、人を動かしやすい。洪武年間・宣徳年間の八股文は初唐である。成化年間・弘治年間・正徳年間・嘉靖年間の八股文は盛唐である。隆慶年間・萬暦年間の八股文は中唐である。天啓年間・崇禎年間の八股文は晩唐である。諸々の君子は六經を用いて八股文の義理を深めて、『史記』・『漢書』を用いて氣(氣概)を広くし、宋儒を用いて範(規範)を正し、正史の兵・農・禮・樂などの志の部分を用いて用(効用)をはっきりさせ、得失や是非〔を判断する〕方法で識(知識・見解)を広め、書物を閲覽することで悟(理解)を大きくし、広く知りさまざまなことを理解して慧(才智)を増やす。これはもともと先の賢人が尊んだところとはほぼ同じである。しかし当時の朝廷は、派閥どうしが競い合い、婦寺(宦官)が權力を独占し、忠良(忠臣)が辱しめられていた。八股文の作者たちは、末運(衰亡の流れ)の兆候を感じ取り、抱いた憤激を述べる。そのため根本なかみは堅くて強く、その矛先は鋭利である。明朝三百年の精神は表現されてほとんど尽き果ててしまった。これが明代八股文の興

✓ 1) 蘇翔鳳の略歴は、同治『蘇州府志』によると、つぎのようなものである。

蘇翔鳳、字は苞九なり。父の〔蘇〕祖蔭 順治壬辰の進士(順治九年壬辰科(一六五二)二甲二十七名の進士)なり。戸部主事督理清江糧餉に除せらる。廉幹(清廉で有能)を以て稱せらるるも、勢要(要職にいる人)に忤き鐫秩(降職)さる。後、署〔山東〕泰安州事たりて、任に卒す。〔蘇〕翔鳳 積學(学問を積む)嗜古(古の事を好む)なり。收名(文名を知られる)すること早きも、遇合(及第)は遅し。性 伉直にして、雅に俗士を喜ばず。康熙壬戌に進士(康熙二十一年壬戌科(一六八二)二甲三十九名の進士)に登り、〔山東〕沂水縣に知たり、半月にして遽に卒す曾陳二志合纂(同治『蘇州府志』卷第一百・人物二十七・常熟縣・國朝・「蘇翔鳳」条・十七葉)。



廢の決定的な流れである、とするのである。

蘇翔鳳は、天啓年間・崇禎年間までも分類に含めて、

- ① 洪武・[永樂・洪熙]・宣德・[正統・景泰・天順]：初唐に相当する
- ② 成化・弘治・正徳・嘉靖：盛唐に相当する
- ③ 隆慶・萬曆：中唐に相当する
- ④ 天啓・崇禎：晩唐に相当する

と考えている。

### (5) 兪長城

兪長城（字は寧世，号は碩園。浙江桐郷の人。康熙二十四年乙丑科（一六八五）三甲五名の進士）は、『可儀堂一百二十名家制義』（康熙三十八年（一六九九）自序）のなかで、明代の八股文の変遷を同じように考えている。

文運（文章の盛衰の勢い）の升るや、其の體 正よりす。文運の降るや、其の體 偏よりす。天順（一四五七年～一四六四年）以前は淳樸（質朴）にして未だ開かず。成[化]（一四六五年～一四八七年）・弘[治]（一四八八年～一五〇五年）・正[徳]（一五〇六年～一五二一年）・嘉[靖]（一五二二年～一五六六年）の四朝は、疎散（まばら）・浩瀚（きわめて多い）・離奇（突飛）・簡淡（簡素で淡白）の境 各々同じからざるも、正面に歸せざるは無し。降りて隆[慶]（一五六七年～一五七二年）・萬[曆]（一五七三年～一六二〇年）は、正なる者 什に七、側なる者 什に三なり。降りて[天]啓（一六二一年～一六二七年）・[崇]禎（一六二八年～一六四四年）は、正なる者 什に三、側なる者 什に七なり。此れ有明一代の升降なり・・・（兪長城「題張爾成稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之四十一・六十一葉・「張爾成稿」条）。

ここで兪長城はいう。つまり、文運（文章の盛衰の勢い）の盛んになるのは、その文体が正しくなることから始まり、文運の下り坂になるのは、その文体が偏向することから始まる。天順年間（一四五七年～一四六四年）以前は質朴で文体の正しいものはまだ始まらなかった。成化年間（一四六五年～一四八七年）・弘治年間（一四八八年～一五〇五年）・正徳年間（一五〇六年～一五二一年）・嘉靖年間（一五二二年～一五六六年）の四つの時期は、疎散（まばら）と浩瀚（きわめて多い）、それと離奇（突飛）と簡淡（簡素で淡白）との境界が、それぞれ異なるもののほんとうの正しいものにたどり着かないものはなかった。時代が下って隆慶年間（一五六七年～一五七二年）・萬曆年間（一五七三年～一六二〇年）には、正しいものが七割、偏向するものが三割となった。さらに下って天啓年間（一六二一年～一六二七年）・崇禎年間（一六二八年～一六四四年）になると、正しいものが三割、偏向するものが七割となった。これが明朝の文運の盛衰である、と考えるのである。

兪長城は、成化・弘治と正徳・嘉靖とをひとまとめにして四つの時期に分類する。

- ① 洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順
- ② 成化・弘治・正徳・嘉靖
- ③ 隆慶・萬曆
- ④ 天啓・崇禎

## (6) 戴名世

戴名世（字は田有，一字は褐夫，南山先生もしくは憂庵先生と尊称される。安徽桐城の人。順治十年（一六五三）～康熙五十二年（一七一三）。康熙四十八年己丑科（一七〇九）の榜眼）は「慶曆文讀本序」で、つぎのようにいう。

……嗚呼、有明一代の文 盛んなり。其の設科の始めに當りて、風氣 未だ開かれず。其の失するや樸遯（素朴）にして文無し。成化・弘治・正徳・嘉靖以來に至るに、文（華やか）に趨く。而れども其の盛んなるや猶お未だ極まらざるなり。天啓・崇禎の間に迫り、文風 壞亂し、一二の鉅公 力を竭して撐拄すと雖も、而れども文妖（文書を以て人を惑わす者） 疊出し、後生を波蕩するも、卒に禁止する能わず。故に有明一代の文を推すに、隆〔慶〕・萬〔曆〕兩朝より盛んなるは莫し。此れ其の大較（大略）なり……（『南山集偶鈔』・「慶曆文讀本序」）。

ここではつぎのように説明される。それは、明一代の八股文は盛んであった。その科挙の科目が設置された最初は、風氣（方向性）がまだはっきり定まらず、その残念なところは、素朴で無文（飾り気がない）であったことである。成化・弘治・正徳・嘉靖年間になると、華やかになってくる。しかしそれは盛んではあるが、まだ極め尽くされていない。天啓・崇禎年間になると、八股文の風格は混乱してしまい、一二の巨匠が力を尽くして支えたけれども、文妖（文書を以て人を惑わす者）が次々と現われ、後の人たちを揺れ動かし、とうとう禁ずることができなかった。したがって、明一代の八股文を評価すると、隆慶・萬曆兩朝より盛んなものはなかった。これが明一代の八股文の大略である、というのである。

すると、戴名世は、明一代の八股文を、

- ① 洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順
- ② 成化・弘治・正徳・嘉靖
- ③ 隆慶・萬曆
- ④ 天啓・崇禎

のように分類して、隆慶・萬曆年間を最盛期と考える。

## (7) 『明史藁』

雍正元年（一七二三）上呈の『明史藁』（志第五十二・選舉二學校・十三葉）は、八股文とのみ限定はできないかもしれないが、「舉業の文字」についてつぎのように説明する。



論者 明の舉業の文字を以て唐人の詩に比ぶるに、國初は初唐に比し、成〔化〕（一四六五年～一四八七年）・弘〔治〕（一四八八年～一五〇五年）・正〔德〕（一五〇六年～一五二一年）・嘉〔靖〕（一五二二年～一五六六年）年間は盛唐に比し、隆〔慶〕（一五六七年～一五七二年）・萬〔曆〕（一五七三年～一六二〇年）年間は中唐に比し、〔天〕啓（一六二一年～一六二七年）・〔崇〕禎（一六二八年～一六四四年）年間は晩唐に比すと云う（『明史藁』（志第五十二・選舉二學校・十三葉：乾隆四年（一七三九）刻 欽定『明史』卷六十九・志第四十五・選舉一<sup>2)</sup>も同文）。

『明史藁』は、明代の科挙の八股文を唐人に引き比べてみると、國初は初唐に相当し、成化・弘治・正徳・嘉靖は盛唐に相当し、隆慶・萬曆は中唐に相当し、天啓・崇禎は晩唐に相当する、という。『明史藁』選舉志では、四期に分類し、成化・弘治と正徳・嘉靖とをひとまとめにする、と述べる。つまり、

- ① 洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順：初唐
- ② 成化・弘治・正徳・嘉靖：盛唐
- ③ 隆慶・萬曆：中唐
- ④ 天啓・崇禎：晩唐

のように分類するのである。

## (8) 方苞と王步青

方苞（字は靈皋，晩年に望溪と号す。安徽桐城の人。康熙七年（一六六八）～乾隆十四年（一七四九））は乾隆四年（一七三九）四月初三日に提出された「欽定四書文選 凡例」で、つぎのように解説する。

明人の制義（決められた形式によって書かれる經書解釈）、體（風格・特質）凡そ屢しば變ず。洪〔武〕（一三六八年～一三九八年）・永〔樂〕（一四〇三年～一四二四年）より〔成〕化（一四六五年～一四八七年）・〔弘〕治（一四八八年～一五〇五年）に至る百餘年の中、皆な傳註を恪遵（謹んで遵守する）し、語氣を體會（體認して理解する）し、繩墨<sup>きまり</sup>を謹守し、尺寸も踰えず。正〔徳〕（一五〇六年～一五二一年）・嘉〔靖〕（一五二二年～一五六六年）の作者に至りて、始めて能く古文を以て時文<sup>つく</sup>を爲り、經史を融液（融かして一体にす

2) 毛奇齡（字は大可，号は西河。浙江蕭山の人。明・天啓三年（一六二三）～清・康熙五十五年（一七一六）。康熙十八年己未科（一六七九）博學鴻儒の二等十九名）によると、選舉志は陸棨（字は義山，原名は世枋，別号は雅坪。浙江平湖の人。明・崇禎三年（一六三〇）～清・康熙三十八年（一六九九）。康熙六年丁未科（一六六七）二甲十四名の進士。康熙十八年己未科（一六七九）博學鴻儒の一等十二名）が作成にかかわったと言う。

公（陸棨）・・・改めて翰林院編修を授け、明史纂修官に充てられ、「成祖文皇帝紀」及び「漕河」・「水利」・「藝文」・「選舉」の諸志を撰す・・・（『皇清予告内閣學士兼禮部侍郎雅坪陸公神道碑銘』『西河文集』神道碑銘二）。

る)し、題の義蘊(精密で奥深い意味)をして、隠顯(『禮記』表記：見えかくれさせる)曲暢(委細に展開する)し、明の文の極盛と爲す。隆[慶](一五六七年～一五七二年)・萬[曆](一五七三年～一六二〇年)の間、機法(巧みに作る)を兼講(兼ねて注意する・重んずる)し、務めて靈變(変化が迅速なこと)を爲す。巧密(技巧：細かい仕掛け)加わること有りとも、氣體(勢いと品格)茶然(衰微する)たり。[天]啓(一六二一年～一六二七年)・[崇]禎(一六二八年～一六四四年)の諸家に至れば、則ち「思いを窮め精を畢くし」(韓愈「潮州刺史謝上表」)、務めて奇特(特別)なるを爲る。載籍(典籍)を包絡(包括)し、物情(世情)を刻雕(刻み込み)し、凡そ胸中の言わんと欲する所の者は、皆な題に借りて之を發す。其の善に就く者は、「興す可く、觀る可く」(『四書或問(論語或問)』子路第十三・「或問第五章之說」)、光氣(氣風)自ずから洩す可からず。凡そ此の數種は、各々長ずる所有り、亦た各々其の弊有り……(『進四書文選表』・『欽定四書文』凡例・一葉)。

つまり、明代の制義(決められた形式によって書かれる經書解釈)の體(風格・特質)は大体のところしばしば変化している。洪武年間(一三六八年～一三九八年)・永樂年間(一四〇三年～一四二四年)から成化年間(一四六五年～一四八七年)・弘治年間(一四八八年～一五〇五年)に至る百年余りの間、みな傳註を謹んで遵守し、その語氣を体得し、規則を謹んで遵守し、少しも踏み越えなかった。正徳年間(一五〇六年～一五二一年)・嘉靖年間(一五二二年～一五六六年)の作者に至って、古文を用いて時文(今の文体)を作りだし、經と史とを融合し、題目の奥深い意味を見えかくれさせて詳しく展開した。これが明代の文の最盛の時期となった。隆慶年間(一五六七年～一五七二年)・萬曆年間(一五七三年～一六二〇年)の間では、巧みに作ることを兼ねて重んじて、つとめて文章の変化が迅速なものを作成した。文章に細かい仕掛けが加わったものの、勢いと品格は衰微した。天啓年間(一六二一年～一六二七年)・崇禎年間(一六二八年～一六四四年)の作者に至っては、「思いを窮め精を畢くし(思いのたけを尽くして精魂をはきだし)」(韓愈「潮州刺史謝上表」)、つとめて普通でないものを書いた。そして經書を包みこんで、時事問題について書き込む。すべての胸中の言わんと欲するものは、題目に借りて書き入れる。その善いものは評価すべきだし、参照すべきである。その氣風は否定すべきではない、というのである。

方苞によれば、明代の八股文は、

- ① 洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順・成化・弘治
- ② 正徳・嘉靖
- ③ 隆慶・萬曆
- ④ 天啓・崇禎

の四期に分類できるという。

そして、その四期それぞれの選択の基準はつぎのようにになっている。

凡そ此の数種は、各々長ずる所有り、亦た各々其の弊有り。故に〔成〕化（一四六五年～一四八七年）・〔弘〕治（一四八八年～一五〇五年）以前は、其の簡要（簡潔に要点をつまみ出す）親切（適切）にして稍（まさに）精彩有る者を擇ぶ。其の傳註の寥寥（少し）たる數語を直寫し、對比に及べば字面を改換して、意義の別かつ無き者は、〔選択に〕「與からず」（『論語』泰伯）。

正〔德〕（一五〇六年～一五二一年）・嘉〔靖〕（一五二二年～一五六六年）は則ち専ら氣息（風格）醇古（古風で質朴）にして、實に發揮（表現）有る者を取る。其の規模（形式）具<sup>そな</sup>われりと雖も、精義の存する無し、及び先儒の語録を剽襲（焼き直し）し、膚殼（空疎）平行（平坦で変化に乏しい）なる者は、〔選択に〕「與からず」（『論語』泰伯）。

隆〔慶〕（一五六七年～一五七二年）・萬〔曆〕（一五七三年～一六二〇年）は明文の衰と爲す。必ず氣質（勇壮な作風）端重（きちんとして重々しい）にして、間架（構成・組み立て）渾成（渾然一体）し、巧みに雅を傷つけざるは、乃ち流弊無し。其れ専ら凌駕を事とし、輕剽（輕薄）促隘（窮屈）にして、機趣（情趣）有りと雖も、之を按じて實理・眞氣無き者は、〔選択に〕「與からず」（『論語』泰伯）。

〔天〕啓（一六二一年～一六二七年）・〔崇〕禎（一六二八年～一六四四年）の名家の傑特（傑出）する者に至りて、其の思力（考えつく）の造す所・塗徑の開く所、或いは前輩の到る能わざる所あり。其の餘の雜家は則ち規矩に倣<sup>そむ</sup>き棄てて以て新奇と爲し、經・子を剽剽（剽窃）し以て古奥（古めかしくて奥があり、理解し難い）と爲し、字句を雕琢し以て工雅と爲す。書卷（著述）富むと雖も・辭氣（言葉）豊なりと雖も、而れども聖經・賢傳の本義轉じて蔽蝕する所と爲す。故に別して之を去り、卓然たる名家なる者と相い混えしめざるなり（乾隆四年（一七三九）四月初三日「進四書文選表」『欽定四書文』凡例・一葉）。

①『詩經』「大序」に「言天下之事，形四方之風，謂之雅。雅者，正也（言天下の事を言い，四方の風を<sup>あら</sup>形わす，之を雅と謂う。雅とは，正なり）」。

方苞は以下のように考える。すべての制義は、それぞれすぐれたところがあり、それぞれ欠点もある。そこで、成化年間（一四六五年～一四八七年）・弘治年間（一四八八年～一五〇五年）以前の八股文は、簡要（簡潔に要点をつまみ出す）親切（適切）でまさしく精彩（生き生きとしている）である作品を選ぶ。傳註のわずかばかりの數語をそのまま書き、対句には字面を書き換えるだけで、対句として意味を対比させて変化させないものは、選ばない。

正徳年間（一五〇六年～一五二一年）・嘉靖年間（一五二二年～一五六六年）の八股文は、風格が醇古（古風で質朴）で、〔その精神を〕ほんとうに表現しているものを取り出す。その形式が備わっていても、実理が存在せず、前儒の語録を焼き直し、空疎でありまた平坦で変化に乏しいものは、選ばない。

隆慶年間（一五六七年～一五七二年）・萬曆年間（一五七三年～一六二〇年）は、八股文の衰退期である。必ず氣質（作風）がきちんとして重々しく、間架（構成・組み立て）が渾然一体と

なっていて、たくみに風雅で正しい趣を傷つけなければ、弊害はない。もっぱら凌駕を行ない、軽薄で窮屈であれば、機趣（風情・おもむき）があったとしても、これをよく見てみると実理（実質的な道理）・真氣（生命力）がない。こうしたものは、選ばない。

天啓年間（一六二一年～一六二七年）・崇禎年間（一六二八年～一六四四年）の名手の傑出した人たちに至っては、その考えつくところや、[考え方の] 経路を明らかにするところなど、時には以前の人たちのいたることができないものがある。それ以外の雑多な人たちは、法則に背いて捨て去ることを目新しいものだとし、經書や子部の書を剽窃して古めかしくて奥行があるとし、字句を飾り立てて、巧みで正しいとする。作品は多く、また字句は豊富であるけれども、聖經・賢傳（朱子「大學章句序」）の本来の意義は、変化して悪習にむしばまれたものとなった。そこでこうしたものを別にして採用せず、ぬきんでた名人たちの八股文と一緒にさせない、という。

なお、方苞と同時代の王步青（字は罕皆，号は已山。江蘇金壇の人。康熙十一年（一六七二）～乾隆十六年（一七五一）。雍正元年癸卯恩科（一七二三）三甲八十六名の進士）も、『程墨所見集』において、明代の八股文を、

- ① 洪武・永樂・洪熙・宣德・正統・景泰・天順・成化・弘治：『程墨所見集一』による
- ② 正徳・嘉靖：『程墨所見集二』による
- ③ 隆慶・萬曆：『程墨所見集三』による
- ④ 天啓・崇禎：『程墨所見集四』による

に分類する。

### （9）文淵閣本「書前提要」

乾隆四十四年（一七七九）二月の日付のある『欽定四書文』の「書前提要」は、つぎのよう

にいう。

臣等 謹しみて〔以下のように〕案ず。『欽定四書文』四十一卷，乾隆元年，内閣學士方苞<sup>う</sup>奉けたる敕もて明文を編す。凡そ四集なり。「化治文」と曰い、「正嘉文」と曰い、「隆萬文」と曰い、「啟禎文」と曰う。而して國朝文は別に一集と為す。每篇 皆な其の精要（精華）を抉（選び取る）し，後に評鹭（評定）す。卷首に恭しく論旨を載せ，次は〔方〕苞の奏摺（奏上文）と為し，又た次は「凡例」八則と為す。〔「凡例」八則は〕亦た〔方〕苞の述ぶる所にして，以て持擇（選択）の指（意図）を發明（説明）す。盖し經義（經書解釈）は宋に始まる。『宋文鑑』中の載せる所の張才叔「自靖人自獻於先王」（『書經』微子）一篇（『宋文鑑』卷一百十一・制策 所収）は，即ち當時の程試の作なり。元の延祐（一三一四年～一三二〇年）中，兼ぬるに經義・經疑を以て士を試みる。明の洪武（一三六八年～一三九八年）の初め，科擧の法を定め，亦た兼ねて經疑を用う。後，乃ち専ら經義を用う。其の大旨は理道を闡發するを以て宗と為す。厥の後，其の法 日々密に，其の體 日々

變じ、其の弊 亦た遂日（日ごとに）に生ず。有明二百餘年、洪〔武〕（一三六八年～一三九八年）・永〔樂〕（一四〇三年～一四二四年）より〔成〕化（一四六五年～一四八七年）・〔弘〕治（一四八八年～一五〇五年）に迄ぶまで、風氣 初開し、文 多く簡樸（簡潔で飾り気がない）なり。正〔德〕（一五〇六年～一五二一年）・嘉〔靖〕（一五二二年～一五六六年）に逮び、號して極盛と為す。隆〔慶〕（一五六七年～一五七二年）・萬〔曆〕（一五七三年～一六二〇年）、機法を以て貴しと為し、漸く佻巧（小手先の技巧）に趨く。〔天〕啟（一六二一年～一六二七年）・〔崇〕禎（一六二八年～一六四四年）に至り、警闢（説得力があり鋭い）奇傑（傑出）の氣 日々勝り、而して駁雜（粗く雜然）として醇（純朴）ならず。猖狂自恣（好き勝手にほしきままにする）なる者、亦た遂に其の間に錯出（絶え間なく現れる／入り混じって現れる）す。是に于いて横議<sup>①</sup>（勝手に議論する）の風を啟き、傾訛（偏って不正）の習を長す。文體 蠶<sup>もと</sup>りて、士習（讀書人の風紀） 彌々壞（衰亡）す。士習 壞（衰亡）し、國運も亦た之に隨う。我が國家 景運<sup>ここ</sup> 聿<sup>かえ</sup>に新にして、乃ち反して正軌（正道）に歸る。列聖 相い承け、又た皆な諄諄（丁寧にくり返し）として士習・文風を以て、勤しんで誥誡を頒（下す）す。我が皇上 復た清真（純真で質朴）雅正（典雅で純正）の訓を申明にし、是の編の録する所 一一聖裁を仰稟す。大抵皆な詞達理醇にして以て傳世（代々相伝える）行遠<sup>②</sup>とす可し。承學の士は、前明の諸集に於いて以て風格の得失を考う可し。國朝の文に於いて、以て趨嚮（傾向）の指歸を定む可し。「聖人の教思 窮まる無し<sup>③</sup>」。是に於いてか有り。徒に以て科名（科擧の功名）を弋取（獲取）するの具のみを示すに非ざるなり。故に時文の選本は、汗牛充棟なるも、今は悉く斥して録せず。惟だ恭しく是の編を録し、以て士林の標準と為す。原本 卷第を分かつ。今、其の篇帙を約し、分ちて四十一卷と為す。乾隆四十四年二月、恭しく校し上つる。

總纂官臣紀昀・臣陸錫熊・臣孫士毅、總校官臣陸費墀（文淵閣本「書前提要」：『四庫全書總目提要』卷一百九十・集類四十三・總集類五・「欽定四書文四十一卷」条とは、数字の異同があるのみ）。

①『孟子』滕文公下に「聖王不作，諸侯放恣，處士橫議（聖王<sup>おこ</sup> 作らず，諸侯 放恣にし，處士 横議す）」。

②『左傳』襄公二十五年に「〔仲尼曰・・・〕，言之無文，行而不遠（言の文無きは，行なわれて遠からず：言葉に出しても文辞がなければ，広く通じない）」。

③『周易』臨卦・象傳（大象）に「君子以教思无窮（君子 以て教思窮まる無し）」。

四庫館臣は以下のように述べる。乾隆元年（一七三五年）、内閣學士の方苞が謹んで承った勅命で明の八股文の文集を編纂した。この書物は、およそ四集で、その内容は、「化治文」・「正嘉文」・「隆萬文」・「啓禎文」になる。そして清代の八股文は、別に一集とした。各編はすべて八股文の精華要点を選び取り、末尾に評価の文を附した。卷首に乾隆皇帝の論旨を謹んで掲載し、その次は方苞の奏摺（奏上文）とし、さらにその次は「凡例」八則とした。「凡例」八則は、方

苞の著述であり、選択の意図を説明する。そもそも、おそらく經義（經書解釈）は宋代に始まるものであり、『宋文鑑』に載せる張才叔の「自靖人自獻於先王」（『書經』微子）一篇（『宋文鑑』卷一百十一・制策 所収）は、すなわち当時の答案の作品であろう。元の延祐年間（一三一四年～一三二〇年）には、經義と經疑とを兼ね用いて試験した。明の洪武年間（一三六八年～一三九八年）の始めに科挙の規則を定め、兼ねて經疑を用いた。後にはもっぱら經義を用いるようになった。その大要は文章の内容と道理を明らかにすることを主とする。その後、その技法は日々精密になり、その形式は日々変化し、その弊害は、日を追って生じた。明朝の二百年あまりの間、洪武年間（一三六八年～一三九八年）・永樂年間（一四〇三年～一四二四年）より成化（一四六五年～一四八七年）・弘治（一四八八年～一五〇五年）年間にいたるまで、氣風が新しく切り開かれ、多くは簡潔で飾り気がなかった。正徳（一五〇六年～一五二一年）・嘉靖（一五二二年～一五六六年）になって、極盛となったと称されるようになった。隆慶年間（一五六七年～一五七二年）・萬曆年間（一五七三年～一六二〇年）は、機法（巧みに作る）を尊ぶようになり、しだいに技巧をこらすようになる。天啓年間（一六二一年～一六二七年）・崇禎年間（一六二八年～一六四四年）になると、説得力があり鋭くつきぬけるような氣風が日々他をしのぐようになり、駁雜（粗く雜然）として醇（純朴）でなくなった。好き勝手にほしきままにするような者が、その間にまた錯出（絶え間なく現れる）するようになる。ここにおいて、横議（勝手に議論する）の風潮が開かれ、傾訛（偏って不正）の風紀が助長されるようになり、文体がおかしくなり、読書人の風紀がますます壊れていった。読書人の風紀が壊れて、明朝の国運もそれに従っていった。我が清朝は、善い運氣に恵まれて、ここに明末の風紀を新たにし、元に返して正道に戻した。歴代の皇帝が継承し、またみな丁寧にくり返し読書人の文風について謹んで警告を下した。我が皇帝陛下は、清真（純真で質朴）雅正（典雅で純正）の教えをはっきりとされ、この『四書文』に収録した文についてひとつひとつ皇帝陛下のご指示をお伺いした。陛下のご指示は、すべて言葉が明快で道理に味わいがあり、代々伝えて遠くにまで伝えるべきである。学問に従事する読書人は、前明の部分で文の風格特長の得失を究め求めるべきである。そして清朝の文から八股文がどのような方向に向かおうとしているのかの意向を決めるべきである。「聖人の教え導きはきわまりがない」とは、ここにあるのである。ただ科挙の及第を獲得するための道具だけを提示しているのではない。したがって、八股文の選集はきわめて多いけれども、いまはすべて除いて『四庫全書』に著録しなかった。ただ謹んでこの『欽定四書文』のみを『四庫全書』に著録して、読書人の標準とする。この書物は、巻数を分割していない。いま巻数をまとめて四十一巻とする、という。

『欽定四書文』の提要なので、当然ではあるが、「書前提要」は、方苞の「進四書文選表」（『欽定四書文』凡例 所収）にしたがって、つぎのように四期に分類する。

- ① 洪武・永樂（建文を含む）・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順・成化・弘治
- ② 正徳・嘉靖



③ 隆慶・萬曆

④ 天啓（泰昌を含む）・崇禎

### （10）紀昀

紀昀（字は曉嵐，一字は春帆，晩年に石雲と号す。河北獻縣の人。雍正二年（一七二四）～嘉慶十年（一八〇五）。乾隆十九年甲戌科（一七五四）二甲四名の進士）は，明代の八股文の変遷の特徴をつぎのように考える。

明 元の制に沿ひ，小しく變通（時に應じて変更する）を爲す。吳伯宗（名は祐，字が伯宗。字で通行する。江西金谿の人。？～洪武十七年（一三八四）。洪武四年辛亥科（一三七一）の狀元）の『榮進集』中に尚お其の洪武辛亥（洪武四年：一三七一年）の會試卷を全載す。大抵皆な義理を闡明し，未だ嘗て才を<sup>ほこ</sup>矜り博きを<sup>てら</sup>炫うを以て相い高しとせず。成化（一四六五年～一四八七年）の後，體裁（文章の形式）漸く密に，機法（巧みに作る）漸く増す。然れども北地（李夢陽）文體を變じ，姚江（王守仁）學派を變ずるも，皆な敢えて其の説を以て經義（經書解釈）に入れず。蓋し<sup>きまり</sup>尺度 是の若く之れ謹嚴なり。其の佛書を以て經義（經書解釈）に入れるは，萬曆丁丑（萬曆五年：一五七七年）の會試より始まる。六朝の詞藻を以て經義（經書解釈）に入れるは，幾社より始まる。是に於いて新異日々出で，明末に至り變態（変化）極まれり・・・（『紀文達公遺集』卷八・「甲辰會試錄序」・一葉～二葉）。

つまり，明は元の制度にしたがって，すこしばかり時代に応じた変更をおこなった。吳伯宗（名は祐，字が伯宗。字で通行する。江西金谿の人。？～洪武十七年（一三八四）。洪武四年（一三七一）辛亥科の狀元）の『榮進集』（卷一）に洪武四年の吳伯宗の會試答案が完全な形で収録されている。その答案は，だいたいすべて義理を説き明かし，才能を誇り博学をひけらかすことをすぐれたことだとしたことはなかった。成化年間（一四六五年～一四八七年）の後，體裁（文章の形式）は，徐々に緻密になり，機法（巧みに作る）も徐々に増えていった。しかし，北地（李夢陽）が文體を轉換し（古文辭派），姚江（王守仁）がそれまでの学説を轉換したけれども，皆なすべてその学説を経義（經書解釈）に持ち込むことはしなかった。おそらく八股文の規則がこのように厳密であったためなのだろう。仏典を経義（經書解釈）に利用するのは，萬曆五年（一五七七年）の會試に始まる。六朝時代のきれいな語句を経義（經書解釈）に持ち込んだのは，幾社に始まる。ここにおいて目新しいものが日々出現することになり，明末になって変化は極まることになった，という。

明初において經書の言葉通りに解釈して作成されていた八股文が，成化の後に形式的な完成をみて，萬曆五年（一五七七）の會試以後からいろいろな要素を取り入れて変化していったというのである。すると紀昀は，明代の八股文をおおまかに，三つに区分することを想定していたといえるのではないだろうか。

ちなみに、紀昀の弟子の梁章鉅（字は閔中、又の字を荊林。号は荊鄰、晩年に退庵と号す。福建長樂の人。乾隆四十年（一七七五）～道光二十九年（一八四九）。嘉慶七年壬戌科（一八〇二）二甲九名の進士）は、『制義叢話』の「例言」で、明朝の八股文を、明初と中葉と明末に分けて三卷にしたという。

・・・制義は宋に始まり、明に盛んなり。洪〔武〕・永〔樂〕より以て天〔啓〕・崇〔禎〕に逮ぶ三百年中に〔八股文の文〕體 凡そ屢しば變ず。亦た猶お唐詩の初・盛・中・晩のごときなり。今、聞見する所や話（話題）の傳う可き者有るに就き、明初の作者を輯して『制義叢話』全二十四卷のうちの〕第四卷と爲し、明中葉を『制義叢話』全二十四卷のうちの〕第五卷と爲し、明季を『制義叢話』全二十四卷のうちの〕第六卷と爲す・・・（『制義叢話』例言・一葉～二葉）。

すると、紀昀と同じように三つに区分して考えていたといえるのではないだろうか。

### （11）石韞玉

石韞玉（字は執如、号は琢堂。江蘇呉縣の人。乾隆二十一年（一七五六）～道光十七年（一八三七）。乾隆五十五年庚戌恩科（一七九〇）の狀元）も同じように考える。

經義の作 宋人に肇まる。明 天下を有<sup>たも</sup>ち、遂に之を以て士を取る。然れども大輅椎輪の<sup>①</sup>制 尚お荒略（未熟で簡略）にして〔成〕化・〔弘〕治に至る。正〔德〕・嘉〔靖〕、規矩粗ば備わる。隆〔慶〕・萬〔曆〕以降、機巧（『莊子』天地・『孟子』盡心上の「機變の巧」）にもとづく：臨機応變の口先だけのごまかし）日々生ず。天〔啓〕・崇〔禎〕に迄び、遂に文章の變を極む・・・（『獨學廬四稿』卷三・文三・「天崇文英序」・十八葉）。

①梁・昭明太子「文選序」の「夫の椎輪（飾りのない粗末な車）は大輅（玉で飾った美しい車）の始め爲るも、大輅に寧<sup>いずく</sup>んぞ椎輪の質有らんや」にもとづき、創始するの意味。

石韞玉は、經書解釈の文章は、宋代の人から始まった。明が天下を保つと、とうとう經書解釈の文で人材の採用を行なった。しかしこの創始された制度は、まだ未熟で簡略なまま成化・弘治年間に至った。正徳・嘉靖年間に、規則がだいたい整った。隆慶・萬曆年間以降は、機巧（臨機応變の口先だけのごまかし）だけの八股文が日々書かれるようになった。そして天啓・崇禎年間になって、とうとう文章の変化を極めるようになった、という。

石韞玉もつぎのように四期に分類しているようである。

- ① 洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順・成化・弘治：形式が未熟
- ② 正徳・嘉靖：形式がほぼ整う
- ③ 隆慶・萬曆：細かい仕掛けの技巧が加えられる
- ④ 天啓・崇禎：文体の変化を極める

## (12) 侯康

學海堂で学んだ侯康（字は君模。廣東番禺の人。嘉慶三年（一七九八）～道光十七年（一八三七）。道光十四年（一八三四）の優貢舉人）も「四書文源流考」で、同じように分類し、方苞の「欽定四書文選 凡例」に従って、それぞれの時期の特徴をつぎのように説明する。

有明の制義の體 凡そ屢しば變ず。洪〔武〕・永〔樂〕より〔成〕化・〔弘〕治に至る百餘年の中、皆な傳註を恪遵（謹んで遵守する）し、語氣を體會し、理法（法則）を以て尚ぶ<sup>たつと</sup>と爲す。正〔德〕・嘉〔靖〕一變し、氣格（氣韻と風格）を尚ぶ。隆〔慶〕・萬〔曆〕再び變じて機法を尚ぶ。〔天〕啓・〔崇〕禎 三たび變じて才情（文才）を尚ぶ。此れ其の大略なり（「四書文源流考」・『學海堂集』卷八・四十五葉）。

侯康は以下のように述べる。それは、明の制義（決められた形式によって書かれる經書解釈）の作成法は、しばしば変化した。洪武・永樂年間から成化・弘治年間にいたる百年あまりは、傳註を謹んで遵守し、その語氣を体得し、法則を尊んだ。正徳・嘉靖年間には、それが変化し、氣格（氣韻と風格）を尊ぶようになった。隆慶・萬曆年間には、ふたたび変化して機法（巧みに作る）ことを尊んだ。天啓・崇禎年間には、また変化して才情（文才）を尊んだ、というのである。

つまり、侯康もつぎの四期に分類する。

- ① 洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順・成化・弘治：傳註に従って、法則を尊ぶ
- ② 正徳・嘉靖：氣韻と風格を尊ぶ
- ③ 隆慶・萬曆：技巧を尊ぶ
- ④ 天啓・崇禎：文才を尊ぶ

## (13) 楊懋建

やはり學海堂で学んだ楊懋建の「四書文源流攷」も同じように、

- ① 洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順・成化・弘治
- ② 正徳・嘉靖：嘉靖年間末に煩瑣で乱雑になるが、歸有光が是正する
- ③ 隆慶・萬曆
- ④ 天啓・崇禎

の四期に分類する。そして、方苞の「欽定四書文選 凡例」を踏まえて、それぞれの優れたところと弊害とを指摘する。

洪〔武〕（一三六八年～一三九八年）・永〔樂〕（一四〇三年～一四二四年）より以て〔成〕化（一四六五年～一四八七年）・〔弘〕治（一四八八年～一五〇五年）に至る百餘年の中、皆な傳注を恪遵し、語氣を體會し、墨繩<sup>きまり</sup>もて謹守し、尺寸も踰えず」（方苞「進四書文選表」：『欽定四書文』凡例 所収）と。所謂ゆる「渾渾噩噩」（『法言』問神：純朴）にして、「太璞（素材のままの玉） 雕らず」（『法言』寡見に「良玉不雕」）なり。而ち簡要<sup>すなわ</sup>（簡潔に

要点をつまみ出す) 親切(適切)にして精彩有る者もて貴しと爲す。「其の傳注の寥寥たる數語を直寫し、對比に及べば字面を改換す。意義は別かつ無き者」(方苞「進四書文選表」:『欽定四書文』凡例 所収)は、其の蔽なり。

正[徳](一五〇六年~一五二一年)・嘉[靖](一五二二年~一五六六年)の作者に至りて、「始めて能く古文を以て時文(八股文)と爲し、經史を融液(融かして一体にする)し、題の義蘊(精密で奥深い意味)をして、隱顯(見えかくれさせる)曲暢(委細に展開する)し、光華(光彩)發越(あらわし)し、氣格(氣韻と風格)深嚴(深く莊嚴にする)にす。明文の極盛と爲す。<sup>①</sup>而ち氣息(風格)醇古(古風で質朴)にして、<sup>まこと</sup>寔に發揮(表現)する有る者もて貴しと爲す。其の規模(形式)具われりと雖も、寔理の存する無く、儒先の語録を剽襲(焼き直し)し、膚殼(空疎)平衍(平坦で變化に乏しい)なる者」(方苞「進四書文選表」:『欽定四書文』凡例 所収)は、其の蔽なり。

嘉靖(一五二二年~一五六六年)の末造、冗蔓(煩瑣で乱雑)に流る。熙甫(歸有光)起きて之を振(救済)う。隆[慶](一五六七年~一五七二年)・萬[曆](一五七三年~一六二〇年)の人 規(コンパス)もて方を員(圓)と爲し、<sup>②</sup>兼ねて機法を講ず。務めて靈變(變化が迅速なこと)と爲す。巧密(技巧)の加うる有りと雖も、氣體(氣勢と風格)茶然(衰微する)たり。故に「氣質 端重(きちんとし重々しい)にして、巧みに雅を傷つけざる者もて貴しと爲す。其の<sup>もつぱ</sup>端ら凌駕を事とし、輕剽(輕薄)促隘たり。機趣(情趣)有りと雖も、之を按ずるに寔理・眞氣無き者」(方苞「進四書文選表」:『欽定四書文』凡例 所収)は、其の蔽なりとす。日々軟調に<sup>おもむ</sup>趨き三十年に<sup>なんな</sup>垂とし、萎敗(枯れる)已に極まれり。

天[啓](一六二一年~一六二七年)・崇[禎](一六二八年~一六四四年)の跳家 出でて之を埽除(取り除く)し、「思いを窮め精を畢くし」(韓愈「潮州刺史謝上表」), 務めて奇特(ありふれたものではない)を爲し、載籍(典籍に書かれたことば)を包絡(まとめる)し、物情(世情)を雕鏤す。凡そ胸中の<sup>たくわ</sup>蘊うる所の宣べんと欲する者は、題に借りて發揮す。故に其の名家の傑特(特出)なる者は、經傳を融[合]して性靈を抒べ、雄奇(雄大ですぐれる様子)奥衍(深くて広い)鬱勃(勢いが旺盛な様子)淋漓(満ちる)にして、「興す可く觀る可し」(『四書或問』『論語或問』卷十三・子路第十三・「或問第五章之說」条), 光氣(風潮・氣風)泯没するを得ず。其の至れる者は、「單微を直湊し」(『韓非子』有度:すべてを集める), 幾んど聖賢の神氣(態度表情)・警歎をして聞くが如からしむ。「思力の造る所・塗徑の開く所、寔に多く、先輩 到る能わざる所なり。其餘の雜家は則ち規矩を<sup>そむ</sup>偏き棄て以て新奇と爲し、經・子を剽剝(剽窃)し以て古奥(古めかしくて奥行がある)と爲し、字句を雕琢し以て工雅と爲す。書卷(著述)・辭氣(言葉)豊富なりと雖も、聖經賢傳の本義 轉じて蔽蝕する所と爲る者」(方苞「進四書文選表」:『欽定四書文』凡例 所収)は、亦復た少なからず……(「四書文源流攷」・『學海堂集』卷八・十

六葉～十七葉)。

①方苞「進四書文選表」(『欽定四書文』凡例 所収)には、「光華發越，氣格深嚴」の二句はない。

②『孟子』離婁上に「孟子曰，規矩，方員之至也(孟子 曰く，規矩は，方員の至りなり)……」。

つまり，楊懋建はつぎのように説明する。「洪武(一三六八年～一三九八年)・永樂(一四〇三年～一四二四年)年間から成化(一四六五年～一四八七年)・弘治(一四八八年～一五〇五年)年間に至る百年あまりの間，みな傳注を謹んで遵守し，その語気を体得し，規則を謹んで遵守し，少しも踏み越えなかった」と方苞はいう。これは「渾渾噩噩」(『法言』問神：純朴)で，「太璞(素材のままの玉) 雕らず」(『法言』寡見)というものであろう。すなわち，この時期のものは，方苞がいうように「簡要(簡潔に要点をつまみ出す)・親切(適切)で生き生きとしているものをすぐれた八股文とする。傳注のわずかばかりの数語をそのまま書き，対句には字面を書き換えるだけで，対句として意味を対比させて変化させない」ところがある。それがその弊害である。

正徳(一五〇六年～一五二一年)・嘉靖(一五二二年～一五六六年)年間の作者になると，「古文を用いて時文(今の文体)を作りだし，經と史とを融合し，題目の奥深い意味を見えかくれさせて詳しく展開し，氣韻と風格を深く莊嚴にし，光彩を放った。これが明代の文の最盛の時期となった。すなわち，この時期のものは，風格が醇古(古風で質朴)で，その精神をほんとうに表現しているものをすぐれた八股文とする。その形式が備わっていても，実理が存在せず，前の儒者の語録を焼き直し，空疎で平坦で変化に乏しいところがある」と方苞はいう。それがその弊害である。嘉靖(一五二二年～一五六六年)年間の末期になると，八股文は煩瑣で乱雑に流れるようになった。熙甫(歸有光)が現われてその風潮を変革して救った。

隆慶(一五六七年～一五七二年)・萬曆(一五七三年～一六二〇年)年間，人々は規(コンパス)を利用して方形を円形にしようとし，それとともに機法を議論して，靈變(文体の変化が迅速なこと)につとめた。巧密(技巧)を加えたというものの，氣體(氣勢と風格)は衰微した。そのため，「氣質(作風)がきちんとして重々しく，たくみに風雅で正しい趣を傷つけないものを，この時期のすぐれた八股文とする。しかし，もっぱら凌駕を行ない，輕薄で窮屈であれば，機趣(風情・おもむき)があったとしても，これをよく見てみると，實理(實質的な道理)・眞氣(生命力)がない八股文である」と方苞はいう。これが，そのすぐれたところと弊害である。

天啓(一六二一年～一六二七年)・崇禎(一六二八年～一六四四年)年間，いろいろな八股文の作者が出てきて，隆慶(一五六七年～一五七二年)・萬曆(一五七三年～一六二〇年)年間の人たちの悪習を取り除き，「思いのたけを尽くして精魂をはきだし」(韓愈「潮州刺史謝上表」)，努力してありふれたものでないものを作り，書物に書かれたことばをまとめ，世情を刻み込んだ。すべての胸中にたくわえたことをはっきりと発言したいとする者は，出題の題目に借りて述べる。そのため名家の中でも特に優れた人たちは，經傳を融合して，心のうちを述べ，雄大

で優れた様子が深くて広く、勢いが充満し、「興す可く観る可し」であり、これまでの光氣（風潮・氣風）を葬り去った。その極まったものは、すべてを集めて、ほとんど聖賢の態度表情や警效を見聞するようにさせる。そのうえ、方苞が述べるように「その考えつくところや、考え方の経路を明らかにするところなど、以前の人たちが到達できなかったところが非常に多かった。それ以外の雑多な人たちは、法則に背いて捨て去ることを目新しいものだとし、經書や子部の書を剽窃して古めかしくて奥行があるとし、字句を飾り立てて、巧みで正しいとする。著述や八股文は豊富であるけれども、聖經・賢傳（朱子「大學章句序」）の本来の意義は、変化して悪習にむしばまれたものがある」。こうしたものは少なくない、というのである。

楊懋建は、以下のように考えた。

◎洪武から弘治年間は、要点をつかみ適切で生き生きとしたものを評価した。傳注をわずかに引用し、句法に工夫がないのが欠点だとする。

◎正徳・嘉靖年間は、明朝八股文の最盛期であったとする。そして、古風で質朴で、ありのままに表現しているものを評価する。その句法が形式通りであっても、前人の語録を焼き直したり、空疎で変化に乏しいのが欠点だとする。

◎隆慶・萬曆年間は、重厚で清雅なものを評価する。技巧が加わったが、内実や風格が充実しなくなったのが欠点だとする。

◎天啓・崇禎年間は、名手は經傳を融合して、自己の心情を述べたすばらしいものを書いた。それまでの人たちが到達できなかった境地のものである。ただ、それ以外の人たちは、規定から逸脱したものが多かったという。

楊懋建は、明末の天啓・崇禎年間の名手の八股文を肯定的に評価する。これは、明末すべての八股文を否定的に評価する清朝初期における見解とは異なるものである。こうした解釈は、清朝の道光年間あたりから始まる天啓・崇禎年間の八股文の再評価と関係があるのではないだろうか。

## おわりに

清朝の人たちは、明になってほとんど定説のようになった唐詩の四変の説を念頭に置いて、明の八股文を四期に分類した。

ただ、明末の自己の考えを主張する傾向のあった八股文と異なり、『四書』の注釈を中心にして八股文を書くようになった清朝初期の人たちからすると、明朝が滅亡する直前の八股文は、時代遅れのものに見えどうしても否定的に評価してしまう。たとえば、清の康熙朝で高官を歴任し八股文の名手としても名高い李光地は、明末の八股文をつぎのように説明する。

明末の時文は、其の議論氣勢を看るに、直ちに前人を凌駕し、掀天揭地（天地がひっくり返るくらいの名声）あらんと欲す。今より<sup>みきた</sup>看來るに、卑鄙無味の甚だしきなり。其の理の



足らざるを以て題に於いて相い干せず。大約 時文（八股文）の壞るるは、肯て書を見ざるより起こる。肯て書を見ざれば、則ち題理に於いて懵然（はつきりしない）たり。理 勝たざれば、則ち詞を以て勝つ（及第）を采るを思う。詞を以て勝つ（及第）を采れば、則ち新奇（奇抜な作風）靈變（思いもよらない変化）を求め、以て人の目を悦ばし、遂に離經叛道（常軌を逸し道理に背く）にして止まる可からず（『榕村續語錄』卷十九・詩文）。

李光地は以下のように述べる。つまり、明末の八股文は、その議論や氣勢（格調）を見てみると、すぐに前人を乗り越え、天地がひっくり返るくらいの名声を得ようと望んでいた。今から見ると、きわめて低俗で意味がないものである。理（条理）が不足していることから題目の意味とかかわろうとはしない。おおよそ時文（八股文）が壊れていったのは、自発的に書物を読まなくなったことに起因する。自発的に書物を読まなければ、題目の条理がはつきりしなくなる。条理から勝ち（及第）を得られなくなると、文章をもって勝ち（及第）を得ようとするようになる。文章をもって勝ち（及第）を得ようとすれば、新奇（奇抜な作風）で靈變（思いもよらない変化）を求めるようになり、人の目を楽しませるものとなり、最後には常軌を逸し道理に背くものとなり止まるところがなくなってしまう、という。

学問しようとしなかったため、四書学研究の伝統を踏まえた議論や説明ができなかった。そこで、文章だけで及第を目指すようになり、奇抜で思いもよらない文書を書いて道理に背くようになったというのである。清初の李光地は、このように、明末の八股文に対して厳しい意見を述べている。

しかし、この観点も清中期以降になると変化する。そもそも、清初には、清政権の意向を反映させて、注釈を重視した八股文を書くようになる。ところが、時間の経過にしたがって、問題に適した箇所がほぼ出題され尽してしまい、注釈を重視した八股文が行き詰まってしまう。これが主な原因となり、また書き方が変化し、明末の八股文の再評価につながっていったと考えられる。

## Transitions in the Ming Dynasty Eight-Legged Essay from the Perspective of the Qing Dynasty

Kunio TAKINO

### Abstract

This paper examines the Qing dynasty's view of the history of the Eight-Legged Essay in the Ming dynasty. The findings show that the history of the Eight-Legged Essay in the Ming dynasty as expressed in the Qing dynasty was one in which the central focus was whether the content was useful for the interpretation of the Four Books.